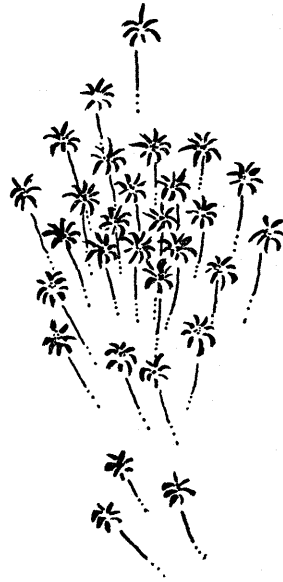


外野席の

おばあちゃん

①



村田修子

「おばさん、どこへいくの」お茶大から音羽の方へ坂をおりて行ったところにある地下鉄にのり込んで腰をおろした途端に、知らない小学生から声を掛けられた。大変人なつこいので話しながら行くと、その子はこれからいわゆる有名な塾に行くのだという。

このように最近が高、中、小学生もすさまじいほ

ど、勉強することに時間をとるらしい。どういふ方向に進むという目安もはっきりしない時期だから、その勉強は基礎的なものではないか、と思うけれども、その子に聞いたことによるとそうではなくて、学校ですることとは全然程度の違うむずかしいことを習いにいく。それを「勉強」というらしいことや、遠くからくる子に便利なように、その塾の近く

には、熱いお湯のそなわったインスタント食品屋があつて、そこで自分でお湯をそそいでできたものをたべ腹ごしらえをしてから行くことなど、驚くことばかりであつた。それは驚きであると同時に、これからの世の中を考えると心配につながっている。このように総てが變つてきている中に住んでいる幼児であるから当然影響を受けている。例えば

「靴がなくなったの」

「どこに脱いでおいたの？　？　？」

いろいろ聞いてみるが、それに対して粘りっこい返事をするよりも

「いいよ、また買うから。買ってもらうから」

と、すぐあきらめムードになつてしまふ。

多分この報告を聞いた母親も、一応の文句は言うけれども、探しに出掛けるよりは、文句を言つて気分が治まつたら「今度は大事にするのよ」といつてすぐ買つて与える方の道をとるに違ひない。

子どもは文句を言われるひとときを過してしまふ

ば結果的には一つも困ることはない。

塾に通うことといい、なくした物を探さないことといい、今の世の中は結果がよければそれでいい、というあたりに問題を含んでいる。

そのときの結果はよくて、ぼろを出さないですませられたことも、矢張りそれが身についたものでないと、いつかは崩れるものだという事実もたくさんに経験している。だから雰囲気的に感じとらせていこう、というような長い目で……というやり方は今どきはやらない、ということを知っているけれども、これが大切なことだという気持ちはいつになつても変らない。

そこで、「おばあちゃん」という立場になつたとき、一つの試みをしてみようと思ひたつた。「ものごとを感じる、なにかを感じとることが出来る人間になつてほしい」その手段として、抱いて庭に出たりあやすときなど、いつもそのときの状況とか状態、私が思つたこと、感じたことなど、全く思いつ

くままのことばにメロディをつけて歌うことにした。例えば、

「ひーでちゃんはい子ちゃん、

お花を見ては にーこにこ

お空を見ても にーこにこ……………」

いつ迄続くか分らないように、目に入るものを次々と材料にし、メロディも全くの、どの趣くまま、転調もあるし、変調もあったりして、ときには自分でもおかしくなってしまうようなものだけれども、そういう雰囲気にした。当然抱いて庭に出たりするときが多いので花等を取り上げる事が多い。暫くしてよちよち歩きができるようになった頃。葉っぱの中に顔を埋めて、「におい、におい」というようなことを言うようになった。

その後弟ができて三、四歳になった頃、私を喜ばすような行動を見せてくれた。それは、私がピアノに向かってしていると、狭い家のことなので、すぐとんでくる。そして私をどかせてお気に入りの絵のつ

いた楽譜を開いて、絵を見て思いつくままに歌を作って歌い出す。メロディも全く思いついたまま、出す音もリズムもみんな即興的に思いついたままなので面白い。例えば「おにごっこ」のうたの頁に鬼のお面が書いてある。

「鬼はどうして、そんなこわい顔して にらんでいるのーかーな、

力が強くって いばっているけれど

こわくなんかないんだぞ

金太郎、金太郎」

（彼の頭の中では鬼と桃太郎が結びついて思い出されたが、とっさに金太郎と間違えてしまった）それがすむのを待って、弟が今度はピアノを叩き出す。矢張り自分が好きな絵のところを出す。

「マシュマロ ぼわぼわ あったかい

たべたら ぶわぶわ あったかい

そーしてなくなったら おわりです」

（彼も雲の絵が書いてあるのをマシュマロと間違

えてしまった)

こうして出てくることは、「何故か」とか「どうしてなのか」という疑問で始まって、自分なりの答え、理由づけで終止する形が大変多い。

年齢が小さいときは多くの子どもにこういう状態が見受けられると思うので、特別な持っていき方をしたから、とばかりは言えないとは思いますが、矢張りそういう働きかけをしたことは影響があるように思われる。それは現在でも続いて、私が呼び掛けや簡単な話しのとき、メロディックに声を掛けると、同じように答が返ってくるので楽しい。

こういった時期は余り長くは続かないものなのでもうじきに聞かれなくなると思われるから、私にとっては貴重なこの体験を書いておく時だと思って、或る音楽振興会の「音楽は人間を作る」という題名の作文募集に応募し、今迄の自分の音楽経験によって得たものと、孫達との経験を書いてみた。

その批評に、「非常によいテーマをつかんでいた」

とか、「教育上重要な問題なので、教えられるころも少くなかった。」というように評して頂いたが、さすが村田武雄先生、「もう一段とポイントを深くつかんで……」とも評された。私がそこで、さすがは経験の深い先生、と思ったことは、私が孫に試みたことは、はっきりとした目標を立て、それに向って夢中になって取り組んだことではない。結果をこうなるようにしよう。と思ったわけではない。「そういう雰囲気の中に置くことがよい。」と思ったから少しだけ機会を多く作った。というにほかならない。だから字で表現するとなお更突込みの少なさが感じられる。私自身も何となく物足りなく思っていたことであったそれを、ちゃんと読み取られた先生の鋭さに感じ入ったのである。

この「いい雰囲気……」というのは、全く結果主義に反発する私の主張にほかならない。

そうするうちに上の子は幼なさがぬけ切らない一年生になった。入学式のときついて行ってみると、

出す声の大きさ、語調、友達に対する態度等々、すべて他の多くの同級生よりは弟的な感じ。そこで思い出したのは、「理想的に、と思って育てていましてが、外に出したときに慌てましたよ……」といわれた○○先生の言葉であった。ここではその良し悪しはさておくことにする。

五月頃の日曜日に授業参観があった。自分が親という立場のときを振り返ってみると、そのときは全く自分の子供の様子だけを凝視してしまうので不満いっぱいになる。周囲の事は目に入らないために、そのあと二、三日は自分でも分るように不機嫌で、これなら見ない方が精神衛生上よかったのではないかしら、と思ったりした。でも、親としてはそうなのかと思うけれど、今度は立場が違うので、「自分がどういう見方をするものか」、「周りの人達はどういう態度なのか」というあたりに焦点を当てて見てみようといつて行った。

上級生になると変化するかも知れないが、一年生

は、見にきてくれることがうれしくてたまらないらしく、知ったか振りに施設のことなど説明してくれる。私は先ずそこで、いやがられないことにホッとする。

授業は型のように展開したが、馴れてない一年生に余り負担にならない程度の進み方の苦労や、物、道具等の出し入れに相当の個人差があるのを見て、先生の用意、配慮等が大変であることが感じられた。子供達は勝手に反論したり、違う意見を無秩序に言ったり、まぜかえしたり、というわけで、その雰囲気は大変に以前とは違う。教師として「変に対応する」、「機をみて指導する」ことの必要を見せられる。

また理科の時間は「校庭にいる虫」というテーマで展開された。

子供達は一応話を聞き、入物を持ったりして机から開放された喜びも加わって嬉々として庭中探し回っている。

そこで大人の側を観察すると、子供のところへわざわざ出ていって「もうつかまえたか」「何を見つけたか」「ここにいるわよ」「あっちにいたからとって上げる」等のことを言いながら子供を連れて行ってしまう。「虫を見つけられなかったら困る」というだけのことで、そこへいく迄の過程はどうでもよいからというわけで自分が先頭になって、他の子供や先生のいるところから離れたところへつれて行ってしまうのである。そういう傾向は、おばあちゃん、また、学校の先生のように仕事を持った母親、とても若そうな母親に多く見受けられた。

おばあちゃんは自分の孫に……、何となく分るけれど「困る」。

教師という立場の母親が手を出すことはもって「困る」、先生自身が結果ばかり尊重しているということにはかならないと思えるからである。

若い母親も、そうすることがどういうことなのか

考えてもみない、という点では同じように困ることである。こうしていつて自分の手に負えなくなったら、それが矢張り塾にやることにつながっていると思えるからである。

その手伝っているのを止めない先生も困る。先生という立場から、矢張り親のとるべき正しい態度というものを上手に教えなければならぬ時期になっていると思うからである。

一年生の孫は入物にだんご虫をみんなと同じように二、三匹とってはしゃいでいたが、そのおばあちゃんは、おじやま虫をみつめて考えていた。

なぜ見ていてやれないのか、一人で活動させてやれないのか、結果だけではなく、見つけられなかったその経験をあとで生かすように計らってやる心づかいをしてほしいものだ、と。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)